

ユニテ

UNITÉ

9



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
クラムシー -1月30日1977年-	井上熊野 2
ロランニマルヴィエーダ往復書簡(5)	南大路 振一訳 10
R.R. のための覚え書きNo.2	椿 充代 22
ユニテの広場	大橋 哲夫 26
ロマン・ロラン研究所から	28
友の会だより	29
あとがき	32
研究所図書目録(2)	(付)

日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

“ 芸術について ”

ゲーテはどこかで、「あまり本を書いたり、読んだりするために、自分で本になってしまう」と言った。今日の芸術の性質が不自然で、病的で、実のないのは、大地の生活に根をもっていないからである。生きた人間、肉と血のある人間の作でなく、「文学者」の作、紙の人間——言葉や、色彩や、画面や、額や、楽器の音や、小壇につめた感覚の精で養われた人間の作だからである。そして真の芸術家は、自分の芸術を売り物にすることを余儀なくされなければならないためには、彼らの芸術以外に、他の知的職業によって生活しなければならぬことが、あまりにもしばしばある。ところが、この知的職業というのが、手仕事で身体を疲らせても精神に自由をのこすのに比べて、創造的想像にとって、いかばかり邪魔になるか知れない！「しかし、はたして芸術作品の美が、それによって失われることはないだろうか？ 芸術は排他的ではないだろうか？ 他のいかなるものとも分担を肯んずるだろうか？ 一日一日を全的に占有する必要はないだろうか？」とわが「耽美主義者」たちは反対するであろう。私はおよそ誠実な芸術家にそのことを尋ねたい。——「日に二時間しか暇がないときよりも、一日中暇なときに、はるかに多く、そして立派な創作をするであろうか？」私は自分で、しばしばそれと反対の経験をした。不如意は精神にとって無益ではない。あまりに大きな自由は悪い靈感者で、思想を無力と無関心にみちびく。人間には刺針が必要である。もし彼の生命が短くなかったら、生きることにそう急がないであろう。時間の狭い制限の中に閉じこめられているので、いっそう情熱的に反応する。天才は障碍を欲し、また障碍は天才をつくる。才能者にいたっては、多すぎるほどである。私たちの文明は、まったく無益な、それどころかまったく有害な才能者どもで鼻もちがならない。彼らの大部分が消滅してしまい、画家がもっと少なく、音楽家がもっと少なく、作家がもっと少なく、批評家がもっと少なく、ピアニストがもっと少なく、大根役者がもっと少なく、ジャーナリストがもっと少なくなつたところで、大した弊害はないばかりか、非常によくなくなるであろう。

宮本正清 訳『道づれたち』

クラムシー

-1月30日1977年-

井土熊野

冬も厳しくなった今、1月30日を真近にして2年前のその日を思いおこすと無限の感慨が甦ってくる。

ちょうど今頃、マリー・ロマン・ロラン夫人から手紙がとどいた。それは数週間前に彼女の自宅で打ちあわせたクラムシー行の最終的な連絡であった。

ロマン・ロラン夫人はモンバルナス大通り89番地に住んでいる。この建物も旧世紀のものにちががなく、パリの他の街並でも概してそうであるように、6階建のくすんだ石造りで、その重厚な壁面や整然たる数多の窓は或は黒々と沈黙し、或は日に映えて輝き、これを飾る繊細な模様格子は恰も階前に聳立するプラターヌの大樹の枝々とともに遠い疎林の梢のごとく光を散らしている。89番地の門扉は、大通りに面して小さい銀行とレコード屋との間にある。扉を押して薄暗い前庭を通り階段を幾つか軋ませて廻り昇ると、そこがFonds Romain Rolland 事務局であり、同時にロマン・ロラン夫人の自宅でもある。決して広いとは言えないこの室は棚と机とで充たされ、ロマン・ロラン研究の資料・書類が山のように、しかし整理よく集められている。夫人はその隙間に静かに住んでいる。しかも、きわめて精力的に、活動的に住んでいる。高令には違いないが、その優しい眼はいきいきと、その頬は少女のように輝き、常に粗衣をまとって、文献の谷間をきびきびと動き、机に向かってタイプを叩き、そして或時はクラムシーに、ヴェズレーに、或時はスイスに奔走すると言った具合である。

「クラムシーのロマン・ロラン文化館の完成式が1月30日の日曜日に行われ、あなたを招待するから一緒に行こう。パリから一緒に行くのは、事務局の連中と、ドイツ人の教授とロマン・ロランの論文にとりかかっているロシア婦人と、コミュ

ニストのコニヨさんとあなたとなるから大へん国際的で愉快である。あなたも学生で余分のお金は無いだろうし、皆が汽車賃を払うのは無駄だから、車に便乗しよう。事務局の若者の他には、そのドイツ人がコニヨかが車で行く筈だから我々はそれに乗ろう。」と言うのが前回の取りきめであった。

その日の手紙も幼児に道順を教えるごとく懇切である。彼女は電話のやりとりをしたあとも必ずと言ってよい程、手紙をくれる。この東洋人は日本語でなければ何も理解出来ないであろう、字で書いて辞書でも持たせれば少しはわかるかも知れぬと思ったに違いないのだ。その上、私のことを学生だ学生だと思っている。時には少年などと言う。私が医学部の教員であると言うと、驚いた顔をして、あなたは一体いくつなのかと尋ねる。白髪を見せても、髪は金髪も褐色も亜麻色も灰色も、いろいろあるからとすましていてとりあわない。事務局の青年などはべべ（赤ちゃん）と呼ばれているのだから仕方がない。

「コニヨさんが車に乗せてくれることになった。ロシア婦人も一緒に乗る。早朝6時半に私の家に迎えに来るから、おそくとも6時15分には家に来なさい。朝食はそこで一緒に食べよう。彼が上って来なければ6時半には路上に出なければならぬ。もしあなたが遅れて一人で路で待っていても彼はすぐ見つけることができる。

我々のうち1人は日本人だと言ってあるから。」という手紙で、そのあと早朝に門扉を開けるためのコード・ナンバーと方法が詳しく説明してあり、そして最後に、よくわかった証拠に電話をよこせと言う念の入れようであった。パリの建物は、浮浪者やアルコール中毒者の侵入を防ぐために、夕刻には大木戸を閉し、夜間にはコード・ナンバーを合わせて錠をおし電気仕掛で開けることになっているのだ。

1977年1月30日、払曉の空気は冷く、夜半からの氷雨は未だ止みやらず、真闇の路を濡らし、幽かな街灯の影を溶かしていた。5時に起きて、おそらく始発のメトロに、終夜ディスコ帰りの若者達とともに乗りこみ、そのメトロはソルボンヌの前をかすめて、次の駅医学部前のオデオンで乗りかえ、リュクサンブール公園の北から西を廻ってモンパルナスに行く。早く来すぎたので、冷い大通りをことごとと歩き、鐘楼の美しいノートルダム・デ・シャン寺院の周囲を巡って時を費したり

した。

コニヨ氏は—— ロラン夫人が気やすくコニヨ、コニヨと言うので、若いコミニストかと思っていたが—— 堂々たる体軀と輝く頭とを有する紳士で、セーヌ選出の上院議員であった。彼はロシア語にも堪能で、同乗のロシア婦人に早速話しかけている。ホルシェビキとか何とか言っていた。

クラムシーは酒で名高いブルゴーニュ地帯ニヴェルネ地方のニエーヴル県にある古くかつ美しい小都市で、木材の集散地として知られ、ニヴェルネ運河を利用して筏で木材を搬出する拠点であったと言う。ロマン・ロランは1866年1月29日ここで生れた。今回の文化館完成の記念行事も、この誕生日をトして昨日と今日とに亘って催されるものである。これから、そのクラムシーまで、約200 km を走ることになる。パリ南郊から高速6番道路に出て、最後に県境付近で国道77号線に乗りかえる筈だが3-4時間はかかるであろう。

前夜は興奮して殆んど眠れなかった。第一、仕事が遅くまでかかった。不在になる向う24時間のクロマトグラフィを、この間、自動で働かさなければならぬ。

この自動装置は度々故障して私の期待をうらぎった。助手は夕方には帰さなくてはいけない。11時頃まで調整と監視についやしたのであった。それに今一つ、ロラン夫人の、あなたは日本の読者を代表して出席するのだと言った言葉が私を混乱させた。これは事実上そうであり、しかし、かなり大げさである。私は万一、式次第において日本人出席者も何か述べよと言われはせぬかと半ば期待し、半ば惧れていた。先年、血友病国際会議が京都で開かれた時、会議の招待宴の末席で、意地悪き事務総長から突然英語のスピーチを指名され、英語さえ一言もしやべれぬ私としては、とんちんかんに誤った単語を並べるだけで滅裂に終り、宴そのものを穢したてまつり、自らも大恥をかけたことがある。だからまさかの時のためにスピーチ用の作文をしておかねばならなかったのだ。

「日本には広い層にわたる極めて多数のロマン・ロラン読者がいる。この文化館にも既にそれが展示されているように、ほとんどすべての著作が日本語訳で刊行されている。ロラン夫人とも旧知の宮本正清先生がロマン・ロラン研究所を創始し、日本ロマン・ロラン友の会を組織して、定期の研究会や出版がなされている。私の

出身高校にも、友の会ができて種々の文化活動を行っていた。先年には、ロマン・ロラン研究者の新村猛先生が、日本有数の大都市圏を含む県の知事に立候補し、民主主義・平和主義の人々の力を結集して奮闘し、敗れたりといえども、反動旧勢力をぎりぎりの線まで追いつめるなど、いづれも高令にかかわらず元気に活躍している。……」ぐらゐまで考えて、途中で少しまどろみそして時計のベルに起されたのであった。

私は車の中で時々眠ってしまった。満目肅條たる田園地帯を過ぎ、丘陵をいくつか登り降りするとヨンヌとニエーヴルの県境となり、やがてクラムシーに到着した時は、折しも朝からの深い雲が切れ、この地の冬には珍しい暖い日差しが街一杯に注がれていた。午前10時前であった。

会場の文化館は、古い建物を改装したものであるが、今日は三色旗に飾られ、白堊の壁は眩しい程の光をたたえて、若やいだ姿に見えた。正面にロマン・ロランの胸像が建つ市立博物館の裏手、彼の生家のあるロマン・ロラン通りの突きあたりがその場所である。この文化館は、Centre Culturel Romain Rolland の通称を持つが、その性格は、日本式に意識するならば、ロマン・ロラン記念青少年会館兼ロマン・ロラン記念文化会館と言ったもので、市の所轄である。10時には市関係の人達がすでに集り、過ぐる夏の日、終日お世話になった助役のグエイボン氏の姿もあった。市長のルボン氏も見え、ロラン夫人は私を紹介し、今は既に知っているの、あなた方は同い年ですよとからかったりした。私の目にはルボン氏の方がはるかに若々しく、はるかに知的であるように見えた。

式場には参列者がつめかけていた。市民達のほか来賓も多く、郡長、国会議員（共産党と社会党）、県会議員、フランス文化館連合会長、共産党県書記長、文化・科学・芸術関係官僚、同諸団体代表等々である。私の昨夜からの杞憂は吹きとんでしまった。この式典は公的なものなのだ、この連中のうち、せいぜい数名が演説をするだけに違いない。そしてお昼にシャンパーニュを抜いてお祝いをする。午後は各室の展示を参観して開散——こんな筋書であろう。昨29日には青少年と、その父兄、教員、市民が集り、高校生によるロマン・ロランの思想と作品についての構成やスタニスラス・ヴイジュリーによるベートーヴェンその他の演奏会があったと

言うから。

ロマン・ロラン文化館完成式は、立錐の余地のない程の多くの参加者を得た式場で、先づ市長ルボン氏の挨拶で始められた。市長は、ロマン・ロラン夫人に感謝する旨から述べはじめ、この建物の修復改装を企画した市の建築技師アヴァル氏に敬意を表し、次でこの建物の歴史を述べた。1601年の建築であると言う。1970年、市議会が買収を決議し、翌年これが成就したこと、さらに修復改装に及び、この間の費用とその負担や協力機関を明らかにし、国家の関与は皆無であり0フランであると述べた。最後に、多くを寄贈して館の内容の充実のために努力したロマン・ロラン夫人のおかげで、われわれは、平和と自由とに情熱を燃やした一人の人間の思い出と作品とを永久に保存することが出来ると述べ、われらの同市民を尊び、この館に、精神を向上させ人間を高め文化の真味を与えるようなすべてを得るために努力しようとした。

当県選出の上院議員ペリエ博士は、党主のミッテランが今日来れなくなったことを詫びた後、当県の文化的水準の問題や、県議会の関与について述べているが何かよくわからない。

フランス文化館連合会長アリス氏は、ロマン・ロランの戦いは自由なそして傷つきやすい魂の戦いであったと述べ、彼の思想をモラリストとして論じた。ヘーゲルやマルクスと対比せしむべき点、音楽家でもあったことなどの意義を述べた。

われらのコニヨ氏は、いかなる攻撃があるにせよ、ロマン・ロランは極めて国民的な、そしてフランスの文明や革命の伝統に忠実な作家であったと指摘し、ついでロランを彼の時代の政治的背景の流れ——ドレフェス事件、第一次大戦、ロシア革命、植民地主義、ファシズム抬頭、レジスタンス——の中にもどして考え、あらゆる圧制に立ち向う“自由”の理由として、この作家の執念をきわだたせて語った。そしてロマン・ロランはわれわれが見失うことのない高い模範であるとし、われわれも彼がそうしたように第3世界の闘争と連帯しよう。われわれは労働者階級の力を、すべての我々人民の力を、進歩と民主主義とフランスの栄光のために結集しようとして述べて大きい拍手のうちに式典は終わった。

演者達はロラン夫人に握手を求め、司会者は、これからシャンパン宴までの間、館内各室の展示を参観しようとアナウンスした。

実は私達は到着後直ちに、先づ館内を見て廻ってしまった。夫人は、昨年より大分よくなったでしょうと、あれこれ指さして少し講釈をしたあと、日当りのよい窓際に椅子を寄せて暫く休息した。助役のギュイボン氏や旧知の人々が、かわるがわる傍に佇んで優しく話しかけ夫人をいたわっていた。コニヨ氏も展示室で深々と椅子に沈み、古い新聞資料に見入っている。

展示室にはこの偉大な思想家の使った机、タイプライターなどの他、彼の生涯と思想、その文化的、社会的活動に関連する幾多の資料が、本箱に、棚に、パネルに並べられている。世界各国語に翻訳された著作、雑誌・新聞への寄稿、リーフレット、写真など。しかしこれらの持つ意味、文化史的意義などをこの場で知るためには私はあまりにも無知であり、かつ、読解力もないのだ。私のこの大きな感動は多分に感覚的でしかないであろう。

昨年の夏は弟と一緒に来た。弟は高校・大学を通じて、ひたすらロマン・ロランを勉強した。論文も書いた。彼なら今日、日本の読者の代表として出席する資格があると思った。100年ぶりと言われた1976年の猛暑の1週間に偶然、弟は来あわせた。ギュイボン氏の案内でここを訪れ、ロランにゆかりあるすべてを市中に見、ブレーヴにある墓地にも詣でた。ロランの遺志によって、この静かな美しいブレーヴの丘陵につくられた質素な墓碑の前に立った時、むやみに汗と涙が流れた。墓石には枯れたグラジオラスが貼りついていた。ロランが第二次大戦中、同志と会合をもった農家の建物ものぞいてみた。ロマン・ロラン高等学校と名づけられた市内唯一の近代的建築にも案内された。そして御当所ブルゴーニュの赤酒で、牛肋と煮豆の御馳走になりながら、ギュイボン氏にいろいろ教えてもらったことだ。われわれの質問に対してギュイボン氏は答えた。「残念ながら、クラムシーの人達は必ずしもすべてがロマン・ロランに愛着を持っているわけではない。彼が早くこの市をはなれたこと、彼の離婚、再婚のこと、カトリックとの関係のことなどが原因であろう。」ロラン自身にも、この土地を愛しながら、この地の社会を好まなかった形跡

がある……………

私は人の混まないうちに、そして日射しのあるうちに、館内の詳細をカメラにおさめた。夫人とグエイボン氏の語らいの場面もとった。勿論、式の演説などは写真にもとり、カセット・テープにもおさめた。昨夏、涼を求めた地下室は花やテーブル・クロスで飾られ既に酒瓶やグラスが仄かな光を放ち、御馳走も並べられている。

夫人や主催者を中心として、今日の完成式を祝う乾杯が行われ、和やかな会話と食欲の時間となった。杯を手にして歩いているうちに、先程、式場の入口で演説のメモをとっていた人に遭遇した。彼の原稿は、ここの地方紙に載せるものと言う。私はパリでその地方紙を求める方法があるかと尋ねると、それは不可能だからコラムシーから送ってあげようと言ってくれた。パリの新聞には今日の行事が載るだろうか、おそらく否だ。ル・フィガロは勿論だめ、ル・モンドもむづかしい。ル・ユマニテならもしかするとと言う感じである。

夫人が呼んでいると言うので行ってみると彼女は今日は当市に留るので、帰りはコニヨ氏と一緒にしなさい。彼は3時半に出発すると言うことであった。

午後の日はすでにかげり、冬枯れの街がそこにあった。私は今年の道すじをすべて辿って歩いた。前には汗を静めに入れて休息したサン・マルタン寺院のゴシック建築は、寒気の中にいよいよ神さびて見えた。燃える太陽の下で水浴びする子供達を眺めながらアイスクリームを食べた河原のキャフェ・レストランにも、今は客は少く、一人でコーヒーを飲んだ。ロマン・ロラン高校に至る郊外の樹林の道も学校も日曜日のため静まりかえっている。太い木組みに厚い壁をぬりこめて建てられた古い家並の間の路地を歩きながら、ふと実験のことを考えた。パリの私の4℃の研究室ではクロマトグラフィが昨夜から2本立てで自動的に働いている。うまく行けば、修飾プロトロビン分子の分画が、初めて、どの時間かに一滴づつ取り出されている筈である。それにしても、あの自動コレクターは何故あんなに度々故障するのか……………これがなければもう2～3日滞在したいものと思う。

午後3時半、再びコニヨ氏の荷物となってクラムシーを後にした。私の携えた弟

の2篇の論文はここに蔵せられることになった。ロラン夫人は今度はヴェズレーにつれていくと言った。ヴェズレーはロマン・ロラン終焉の地である。そこにもロラン博物館があり、ジャン・クリストフを書いた部屋がある。今は暖房がこわれて住めないから春になったら一緒に行こうと言うことであった。私は高田博厚が書いたスイス、ヴィルヌーヴでの出来事について尋ねたいことがあったから、それまでもっと言葉がわかるようにならねばいけない。

果せるかな、パリの新聞はどれも一行の抜いすら無かった。同じ日に落成式を迎えた、かの悪名高きポンピドゥ館の記事ばかりが派手に載っている。しかし、数日後に送られて来た地方紙ル・ジュルナル・デュ・サントルとラ・モンターニュの両紙は、3日間に亘って四半頁を割き、写真入りで詳細に報じていた。

私は、この切り抜きと、当日の写真とで、[#] クラムシー — 1月30日 1977年 — ロマン・ロラン文化館完成式の日、と題するアルバムを作り、ロラン夫人に捧げた。同じものを更に2冊つくり、一つは、式の録音テープのコピーとともに宮本正清先生の研究所にも捧げた。今一つは私の手許にある。しかし、新聞は読んでもなかなかわからない。テープに至っては何度聴いてもさっぱりわかったためしがない。(以上)

注

- ① 三重医学部新聞第2号(1979年2月20日)より転載した。
- ② R・R文化館の外壁の色は、実際はベージュであるが、その落成式当日の輝かしさの印象として筆者はつい白垂と書いてしまった。

マルヴィーダとロランの往復書簡(5)

I マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年3月16日、月曜日

したい友、私があなたにたいし以前の私ではないなどという考えが、どうしてあなたに浮かんだのでしょうか。私はいつも自分が感じるままに振舞います。そしてあなたにたいする私のふかい愛情にはいささかの変化もないのですから、別人というような様子がここから生まれるわけはありません。ただ、あなたのことが絶えず心配なために、あなたが目の前にいるのに、思いに沈むといったことが時折あるのかも知れません。私はこの世界のすべてのことよりも、あなたのことを考えます。そして、あなたに成長の全き自由を与えるために最善、最上と思われることをあなたのためにしてあげたいのです。ただ、あなたが自分自身に疑いをもち、自分には意志しようとする意志が欠けている（結局これはナンセンスです）と主張するとき、そしてあなた以外の者になりたいと願うとき—— そのとき私は悲しくなります。そして、あなたが所有していないと思う力—— その力を獲得するための手段をあなたが拒否するとき、私は少しばかり腹が立ちます。なぜとってあなたはもっているのです、この力を。ただこの力が、ある時は浪費されたり、ある時は不発に終わったりしないためには、時間をかけてそれを平衡のとれた状態にする必要があります。そしてより高い資質をもつすべての人間はこの仕事を自分のなかでやり遂げねばなりません。そしてそれは—— いいですか？—— 容易になされるのでもなく、急速になされるのでもありません。ところであなたは私とまったく違って、私のように卒直ではありません。それであなたの表情に現われては消える影は、それが真剣な

ものかどうか分からないために、私にとっていつも不安の種です。ですから私にたいして自分のことを語りすぎるといった心配はけっして、けっしてしないで下さい。私にはとても興味があるので—あなたが話して下さることのできる一切にもまして。もちろんあなたとありとあらゆることについて話をするのは楽しいですが。そして白状しますが、あなたの間近にせまった旅行は私にはひじょうに「不愉快」です。あなたが私のところに滞在される日は、そうでなくても残り少ないのに、さらに4週間だけ短くなるというのですから。公平にみてあなたにたいする私の友情は利己的なものではありません。この前の旅行はあなたにとって是非とも必要でした。それで私も喜んだのです。しかし今は（『サルヴィア^リアティ』を放棄した以上）将来の仕事にとりかかって、不安がる人びとを安心させ、あなた自身も満足されたほうがよかったと思われるのです。しかし、ああ、この旅行は止めることができません。今回はあなたの不在が^{つらい}ものになるでしょう。ご機嫌よう、親愛なる友。

注

- 1) 『ユニテ』4号、20ページ参照。

II ロランからマルヴィーダへ

パルマにて

1891年3月24日、火曜日の夕方

したい友、ローマでは雨、キウシでは積雪、フィレンツェでは春、ポローニャでは冬霧、そしてさいごにパルマでは月光と寒空。これが私の一日の、ただ一日の旅行の手みじかな報告です。あなたのサンドイッチは深い感謝をこめていただきました。このイタリアはひどい国です。どこにも食物を手に入れるところがありません。12時間というもの、私はサンドイッチで生きました。パルマに着くと私は人食い人種のような勢いでニワトリに飛びかかりました。あの瞬間にもし誰か菜食主

義者に出会っていたら、私はそいつを食いつくしたことでしょう。私は時刻表に『パリーニ¹⁾』にかんするメモをいっぱい書き込みました。ところが不幸にも同じ車輦にいた一人のフランス女性にフランス人であることを知られてしまい、彼女相手に無数の馬鹿話をする羽目に陥りました。私はまさにコレッジオを「こきおろす」心境です。奇麗なものに死を！です。

そこへツッキが私にたいし愛想のよくなかったことが思い出されました。切符はもう手に入らなかったのです。憤慨して晩の11時にでも出発したいほどでした。

しかし今朝がたカンパニャの平原は何と壮大だったでしょう！ 垂れこめた雲の下、白雪がかすかに輝く紺碧の山々。私の心は暗いでした——しかし腹をお立てにならないで下さい、それは何も悪いことは意味しない悲しみです。おお、ローマ！ローマ！このことばは私にとって、この世界の他のすべてを越えるものを藏しています。

パルマにて、2時

コレッジオにたいする拒否的な態度をくずさぬことは、私にとって困難ではありません。彼の描いたキリストとマリアの昇天（ゴダール父子³⁾）は綱渡り師の芸に——少なくともバレエに影響されています。どれほど多くのバレエ的な身振り（腕と脚）がそこに潜んでいるかは信じられないほどです。私はツッキがとても好きです。しかし福音書や使徒行伝からの場面ではちがいます。もしあなたが——大いになりそうなことですが！——私の野蛮さに憤激されるなら（私の野蛮さをお笑いになる——このほうがもっとありそうなことです！——のなら別です）、白状しますが、これらの絵の何枚かにみられるブロンド髪の奇麗な顔や思い悩むような身のこなしが気に入らぬほど私は野蛮ではありません。しかし作品全体と作者には私はとても好感がもてません。私はこれら早熟の子供たち——顔をなさぬこれらの目が嫌いです。私は偽りの素朴さが嫌いです。私は空虚なおしゃべりが嫌いです。心が冷酷（そもそも心があるとしてですが）なくせに、過度の感動や愛情を自分にも他人にもみせようと懸命になる連中が嫌いです。私は不実の人間、氣どった人間、わざとらしい人間が嫌いです。そしてこれらのものは皆、指めきを満たすほどの血もありま

せん。それなのに人はこれを『⁴⁾昼』と呼ぶのです。『ランプの光』がいいところでしょう。明け方の2時と3時のあいだの舞踏室の雰囲気です。「しかしとても奇麗だ！」まさに奇麗すぎます！舞踏室にはひじょうに奇麗な人間がいるにはいるでしょう。しかしそれだけでは彼らが不実でないことを意味しません。いや、奇麗なもののは仮借なく減ぼされねばなりません。人類は美しいものへの憧憬がいつも奇麗なものにおいて満たされたと思ひ込んだのです。美しいものと無との間には仲介物があつてはなりません。私は二種類の真実しか承認しません。それはルネサンス初期の荒々しい卒直さか、それとも、ギリシア古代の気高い無垢と調和的な美です。他はすべてブルジョワ的です（どうか驚かないで下さい。「人は何物にも驚いてはならない。」⁵⁾）

とうとう見付けました、私の愛する、レオナルド作の頭部像を。⁶⁾ 出発の前の晩あなたが下さったあれです。無数のガス灯の光のなかの純粹の太陽。それでも、レオナルドの作かどうか全く確實ではない、という主張があります。それはどうでもよいことです。私たちにとって確実なのは、レオナルドが一つの神話であり、ホメロスと同様に、またすべて偉大な芸術品の作者の名前と同様に、一つの伝説的な名前であるということです。

だが本当です、彼はやっぱり魅力的です！いったい誰が？— コレジオです。しかし構いません。私は彼を憎みます、私は彼を憎みます。

マントヴァにて
水曜日の夕方

また強行軍の一日でした。私はモーデナ見物のために数時間をうまく利用しようと思ひました。足を留めてみるだけの価値はあります。モーデナからは車輛にいるのは私一人でした。月のやさしい光だけに見守られて。（天狼星は^{シリウス}ずっと見えませんでした。）私の心は憂うつに閉ざされていました。私は昨年のことをずっと思い返しました。月の光には悲しいものがありました。冥府のアキレウスが地上のことを考えたとき、彼の涙をそそったのは、これに似た光であつたにちがいありません。⁷⁾

さようなら、したい友。今晚ヴェローナで家族に会えると思います。バルマに速達が来ていました。

心をこめてあなたを愛します。

R. ロラン

ひどい天候です。

注

- 1) ロランの初期戯曲の一つ。Baglioniはルネサンス時代にベネチアの町を統治した一族。
- 2) Zucchi. 当時ロランが熱愛した美しい女流舞踏家。『内面の旅路』でも回想されている。
- 3) 通俗音楽家 Godard (1849—95) を指すのだろうか。文章が明らかでない。
- 4) Correggio の傑作『聖ヒエロニムスのマドンナ』(1528) のこと。国立美術館蔵。
- 5) ラテン語の慣用語 Nil admirari から (?)。
- 6) 国立美術館蔵。
- 7) 『オデュッセイア』XI に関連して(?)。

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年3月27日、金曜日

お手紙を受け取ったところです、したい友。いま哀れなコレッジオにたいする
ように、そんなに憤激しているあなたを見るのが私にとってどんなに嬉しいか、あ
なたには想像できないでしょう。これで私の心は生き生きし、満足のあまり私は笑
いたくなります。[芸術] アリストクラシーにあの二つしかないというあなたの
意見はほんとうに正しいです。そしてコレッジオ— あのブルジョワ的な者はあな

たに委せます。私はいちども彼を愛したことはありません。ご覧になったとおり、バルマ滞在の記念にあの数枚の絵ハガキしか持って帰りませんでした。(— —)
ええ、たしかに「あれか、これか」は一つしかありません。「一切が無か」がそれです。思い上がった凡庸だけが憎むに値します。心の奥底では私もあなたと同様にラディカルです。私が武器を置いてしまったかのように見えるとすれば、それは、私がもう十分に仕事をし、いまは休息に憧れるからであって、一方、私の確信は少しも損われていず、いざという時には一挙に現われるでしょう。それから、不幸な現世の人間たちの不完全な状態にたいする無限の憐みが、時として私を寛大にもするのです。

(— — —) 想念の不思議な結びつきから、私も昨年のことをあれこれ考えずにはおれませんでした。幸いなことにローマは——いろいろのことがあったにせよ——あなたにとってローマであることに変わりはありませんでした。そして私は、ローマが天狼星シリウスの光の下に、そして月の光の下にではなく、忘れがたい思い出の3ヶ月をさらにあなたに恵んでくれるよう、私たちの愛する神々に懇願します。

どうかあなたのお母様と妹さんがお元気でありますように。私からくれぐれもよろしく。サンタ・マリア・デロルト1)のチーマも忘れないで下さい。

あなたの友、M. マイゼンブーク

注

- 1) ヴェネツィア北部の Madonna dell'Orto 教会のこと。Cima の描いた祭壇がある。

IV ロランからマルヴィーダへ

ヴェネツィアにて

1891年3月29日から30日への復活祭

(— — —) マントヴァは面白いでした。そこのマンテーニャたちの作品は大好きです。(バドヴァのそれ以上に)。しかしジウリオ・ロマーノのおかげでイタリアでもっとも醜いものを見ることができました。「巨人の間」¹⁾がそれです。一生涯、彼に我慢がならないというのには、これだけで十分です。

ヴェローナはたいへん美しい町です。現代生活の焦燥は、この地でも、シェイクスピアに歌われた愛の物語の甘美な悲哀のうちに夢想することを許しません。残念なことです。しかし教会の美術品はそれを埋め合わせてくれます。とりわけ、素晴らしいヴェロネーゼとマンテーニャのような芸術家たちが。

私たちは数日間バドヴァに足を留めました(もう一度、帰り道にそうするでしょう)。町よりも、そこにある他の芸術品よりも、私にはアレーナ礼拝堂[スクロヴェニ礼拝堂]が気に入りました。ジオットが私にこんな深い感銘を与えたことはどこにもありません——フィレンツェでも、アッシージでも。ことに私はきびしい節度、感動を抑える雄々しい力、悲劇的な簡素さを愛します。キリストの形姿を彼よりもよく理解し、信仰を彼よりも強く感じた画家はほかにありません。

ヴェネツィアには真暗な夜に着きました。黒いゴンドラが細い運河の神秘的な闇に呑まれて行きました——遠くの空から伝わる、また水面を渡るすべての鐘の音に震えるしじまの中を。遠くから歌声が響いて来ました。物影の中を二つ三つ灯火が滑って行きます。びしゃびしゃいう水音が混ざる低いギターの伴奏。運河の上に漂う大きな暗い館の群れ。そして今朝はマルコ広場に明るい陽光が照りました。サン・マルコ大聖堂を覆う金、銀のさざ波。その内部では盛式ミサ——オペラのように装飾され、物々しく。私のいちばん好きな素晴らしい総督宮^{ドゥージェ}。島の真中にサン・ジオルジオ教会のうす赤い鐘楼^{ツグナ}の望まれる緑がかつた渦。そして柔かな青一色の空。

— あなたのこの女友だちについて心配はご無用です。あなたのヴェネツィアはまた私のものでもあります。といって私はこのために私の詩的な、親愛なローマにたいし心変わりはありません。ヴェネツィアの壮麗さの中には何か派手なものがあります。それでもしそれにたいする感覚をもち、また生を愛しているなら、人はこれに抵抗することはできません。しかしその壮麗さのほかに、私は深い内面の感動、想念の休止、死の前味（それはこれらの静かな館において、これらのゴンドラと運河において味わわねばなりません）をおぼろげに感じます。しかし感じつくしたというのには、私はまだヴェネツィアを十分には知っていません。ただ一つ、少しばかり失望したことがあります— 例のリドよりは私はむしろ他の浜辺^{はまべ}を取ります。また他の海を取りたくなります。自然と風景の点でのオランダとの類似が私には目立ちます。

『パルヨール』は中断せざるをえませんでした。私は彼らのパッションを自分の身に背負うのには疲れすぎます。したい友、私がこんなに疲れやすいことに腹が立ち、また私がこんなに弱いことが悲しいです。体力の無いことが私を興奮させ、また沮喪させます。私の魂が宿るのは別の肉体であるべきだったように思えます。自分の無力感に襲われる瞬間には、一切が移ろい、一切が遁れ去り、一切が消えるのを感じます— 異教のメランコリックな哀歌詩人たちがいうとおり。これらの詩人については何度かお話したことがあります、彼らの心臓の鼓動を私は時折自分の心臓のなかに感じます。

母と妹とは約束の時刻にヴェローナで落ち合いました。二人は元気で、旅行をとっても喜んでいます。ちょうど今日は母の誕生日です。彼女は、26年前にヴェローナにいたこと、そして私もともかくいたことを思い出しました。— したい友、あなたはおそらくご存知ないでしょうが、私の魂がこんなに突然イタリア的な正体を現わしたのは、たぶん、それがイタリアで生まれたからなのです。

さようなら、したい友、あなたを心から愛します。

R. ロラン

注

- 1) 有名な「公爵の館」(Palazzo Ducale)の一室と思われる。

V マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年4月2日、木曜日

　　したい友、私にはどこ宛てに手紙を出せばよいのか、またあなたがいつ帰られるのか分かりません。しかし私はあなたと話がしたくてなりません。あなたの不在がつらく感じられて来ました。訪問客があるたびに、内心、それがあなたでないことが悲しいのです。やって来るのは立派な人びとです。しかし彼らが私にとって何だというのでしょうか。この私を動かし、駆りたてるいくつかの想念のほか、私の心ふかくにまで語りかける人間はもう殆どいません。そしてこれらの人間のひとりが欠けるとなると、それは、一つの絆がこの生の世界を離れて、いとしい亡霊たち（軽蔑の意味での亡霊ではありません）の世界へ移ることを意味します。——いまの私はその世界のなかで生きることのほうが多いのです、生きた人間とともに生きるよりも。あなたの不在が長びけば私がどんな奇妙な気持になるか、私はそれをあなたに言うことはできません。あなたは私にとって夢に化します。——物悲しく穏やかな調和につつまれて私の魂のなかを支配している、在りし日のすべての懐しい夢と同じく。そこへあなたから便りがあると、それは私には大きな喜びです。なぜなら私はあなたが今でも実在していることを感じますから。ヴェネツィアからのお手紙はたいへん嬉しかったです——あなたはあの大事な町を愛しているのですから（あなたがあの町を女性に見立てていることは知りませんでした）。あなたがヴェネツィアに住むとすれば、同じように大事なローマを裏切ることなく、あなたはもっとヴェネツィアを愛するにちがいません。しかし私の心を打ち、悲しませたのは、あなたの身体の弱さについての嘆きです。（————）

　　いまグルリの音楽会から帰って来たところです。グルリのことはいつかお話したことがあります。彼はヘンデルとバッハの二曲で始めました。どちらも素晴らしく見事な出来です。それから崇高な作品111のソナタを。第一楽章を完璧なテクニッ

クと南国的な情熱でもって弾きました。しかしアダージョ楽章を弾いたのはカラブリア地方〔南イタリア〕の人間の魂で、あなたの演奏のようにベートーヴェンの魂ではありません。あなたの演奏の卓越性をあらためて感じるのは何と嬉しいことでしょう。

VI ロランからマルヴィーダへ

ヴェネツィアにて

1891年4月2日、木曜日の朝

したい友、ヴェネツィアを去るのはつらいことです。もしそれによってあなたとローマにまた近づくのでなければ、私は絶望することでしょう。ヴェネツィアの町そのものが完全に私を征服しました。ヴェネツィアの芸術家たちについては必ずしもそうではありません。驚くべき独創性と偉大さをみせる建築家のことを言うのではありません（この場合にも私は力強いフィレンツェの建築家のほうに一種特別な愛情をおぼえますが）。しかし絵画は私の期待に全面的には応えてくれませんでした。私はヴェネツィアから熱烈な崇拜者として戻ります——ルーベンスの！ フランドル地方を知っている場合、ヴェネツィアでルーベンス——そこには不在であるのに、しかも遍在するルーベンスへの思いにつきまといわれないでいることは不可能です。ヴェネツィアのいたるところで彼の師匠たち、彼のモデルたち、時には彼の身ぶり、彼のハーモニー、彼の作品への構図に出会うのです。ヴェロネーゼの彩色とティントレットの劇的な表現が彼をすっかり満たし、彼を変えたのです。しかし彼は彼で情熱的な魂でもって両者をつくり直しました。そして私の意見では、この弟子は師匠たちをはるかに凌駕しています。ただ、純粋に装飾的な絵画では私はヴェネツィア派の絶対的な優位を感じます。ヴェロネーゼは総督宮で大きな楽しみを与えてくれました。

ティントレットとは言えば、私は彼を憎むと同時に崇めます。この画家について

私ほどひどいことを考える者はありません。憤激して私はスクオラ・ディ・サン・
ロッコ¹⁾を出て来ました。カタログに載った作品の前を一つ、一つ同じ冷静さで通り
すぎる鈍重な英国人たちは私はひつつかみたくて、仕方ありませんでした。総督
官の『天国』はまったくのナンセンスです。健全な人間悟性を欠いた、こんな下ら
ぬ混乱を描くには、完全な没趣味が必要でした。しかし私にどうしろというので
しょう。ところがアカデミア美術館では私は打ち砕かれました—— その同じティン
トレットに。そうです、『女奴隷を解放する聖マルコ』の前では私は一種の魔力に
屈しました。その魔力は今なお続いています。私はこの作品のなかに脈動する生き
た呼吸を感じ、心底まで打たれました。ヴェネツィアでこんな印象を私に与えた作
品はほかにありません。というのは、ティツィアーノについてみると、私はさしあ
たり彼を探しているところです。私はここヴェネツィアで見るとは全くちがった
作品を想像していたのです。フィレンツェ、パリ、そして[ローマの]ホルゲーゼ
美術館の彼の作品から、私は或る壮麗さを彼に帰していたのですが、それがここには
見あたらぬのです。ベデカー²⁾が異議を唱えても無駄です。偉大な情熱的もしくは
宗教的な場面では、この人物には劇的な感動があまりにも欠けています。すべて
計算づくめです。完璧さが感じられます。それは恐ろしい欠点です。ティツィアー
ノは私にとっては異教徒です。私は彼が肉感的な夢、感能的な憧憬から醒めるのを見
たくありません。トリブーナの『憩うヴィーナス』³⁾、ヴィラ・ホルゲーゼの『聖
愛と俗愛』をあまりにも愛する私は、『昇天』や『聖霊の降臨』や、福音書のその
他の場面を題材にしたものをあまり楽しむことができないのです。—— カルパッチ
オはたいへん奇麗です。テーマの光は私を魅了します。チェルターノ・ボニファチ
オとベルリーニはたいへん気に入ります。私は『アポロとマルシウス』を見まし
た。写真のほうが美しい感じですが、線が少しきついです。ヴィラ・アミエル⁴⁾に掛
かっているレオナルド作の神秘的な婦人の頭部像を探したのですが駄目でした。

ヴェネツィアは私を魅惑します。町を町として、それ自体を私は愛します。その
芸術家たちもひじょうに愛しますが、しかしヴェネツィアの真の美しさはヴェネツ
ィアそのもの—— その実体、その位置にあると思います。その他のものはすべてそ
れに付け加わり、互いに合わさって全体的美観をつくるのです。しかしそれらは派

手な添え物です。私が愛するのは緑がかつた^{ラッパ}鴉です。そしてまた見事な花のように、^{ラッパ}鴉に沿って四方に林立する館です。もし私がたいへん幸福な人間であるなら、私はここで生きてく思います。生き、生に駆られ、生を味わいつくすのです。

私は— いや、私たちは出発し、フェラーラ、ラヴェンナ、リミニに滞在し、それから帰還します。木曜日にはローマに到着するでしょう。到着後、私からもっとくわしくお話します。あなたが報告を受けないというようなことを私はいたしません。

では、又、したい友、どうかお達者で。

あなたを愛するあなたの友

R. ロラン

私は少しばかりの静寂、完全な精神的休息がほしいです。しかし見ざるをえないのです— 何度でも、そしていつも新しいものを。いままし3ヶ月の休息が期待できればどんなに良いでしょう。

注

- 1) 「聖ロッコ学院」(16世紀)。Tintorettoは長年ここに滞在し、聖書を題材にした数多くの作品を仕上げた。
- 2) ドイツの権威ある旅行案内書。
- 3) < Tribuna >はウフィツィ美術館(フィレンツェ)の特別な一室の名称。かつては同美術の逸品の陳列にあてられていた。『戀うヴィーナス』とは『ウルビーノのヴィーナス』のことであろうか。
- 4) ヴェルサイユにあった、マルヴィーダの養女オルガ・モノー夫人の住居。ロランは最初ここで恩師のモノー教授をとおしてマルヴィーダに紹介された。

<訳者あとがき>

言イタリアとシチリアの旅で古代ギリシアを味わったロランは、ローマに戻ると間もなく、母と妹を出迎えに北イタリアに赴いた。これを機会に彼がバルマ、モー

テナ、マントヴァ、ヴェローナ、パドヴァ、ヴェネツィアなどの諸都市でなしたルネサンス体験がここには語られている。ことばの端々にはロマンの生涯をつらぬく芸術観がうかがわれて興味ぶかい。

南大路 振 一

R. R. のための覚え書き No. 2

——『魅せられたる魂』を読み終えて——

椿 充 代

1977.12.21 夜中12時

ラルゴが聞こえる。

そして、アンネットが私のおなかの中に受胎したような気持だ。

『ファウスト』の最後“女性なるもの……”とのハーモニーが聞こえる。

抱擁である。(Ⅲ. P375 「真の音楽はひとつの抱擁である」)

『ロマン・ロラン全集』を購入して以来10年もの間、何度読み始めても途中で放り出していたこの大作を、やっと読了した時に、思わず余白に書き込んでいたのが、こんな言葉である。

京都の友の会では1ヶ月前に終っていたのだが、途中からついてゆけなくなっていたのだ。1975年の5月に講読がスタートした時の私は、公私両面共にどん底の状態だった。今考えると、精神分裂の一手前まで行っていたのではないだろうか。そんな折「何年かかるかわからないが『魅せられたる魂』に取り組んでみましょう」ということになったのだ。何度挑戦してみても息が続かなかった作品だけに「今度こそ」という気持と共に「狂ってしまいそうな自分が頼りとするのできる杖は、これしかない。」という悲愴な気持が混乱した頭の中を駆けめぐっていた。そして、さらに「この長い道程のあいだに、本当の自分の気持を見付けることが

できるのではないか。読み終えた時には、何らかの新しい自分が方向付けられるのではないか。」という望みもあった。

「アンネットとシルヴィ」「夏」そして「母と子」。自分の中で、何かを確認され、解化していくような思いで、慎重にかつ感慨深く読み進んで行った。ところが第4巻「予告する者」に入ったとたんに、何となく親近感が感じとれなくなったのだ。なぜだろう。何が違うのだろうか？ぼやぼやしているうちに「ひとつの世界の死」の第3部「罪の風」の報告者に指名されてしまった。しかたなく、ふり出しにもどるつもりで「新版への序」を読み直してみて「母と子」と「予告する者」の間に3年半の時がある、ということを知った。ロランのこの3年半を理解しなければ、自分も次へ進めない。インドとソビエトが大きな原因だということはすぐに想像できた。(仮にそれだけではない、としても。)……とにかく報告者としての発表だけは済ませた。ロランでさえ長期を要した問題を、そう簡単に理解できるわけがないから、と自分を慰めながら。

ところが、次の「出産」を読み出したら、本当に不安になってしまった。今までのロランではない。何があったのだ？ 親しい人からの手紙が、急に代筆者の手紙になってしまったように思えた。テーマだけではなく、文章そのものが、未知の味になってしまったようだった。

私にとってロランは、師、先輩、友人、兄、恋人 etc. 表現するにふさわしい言葉の見付からぬような存在であっただけに、これは大変だと思った。『クレランボー』を読んだ時にも、心臓が冷たくなるほどの恐怖感があった。けれどもそれは“死”の予感が的中するだろうという確信に由来していた。今度は違った。一心同体で進んできた恋人が急に離れてしまったようだった。相手の中に自分が写っていたはずの鏡がなくなってしまったのだ。“読む”というのは、鏡に写る自分自身と会話することではなからうか。今までだって、ロランから遠のいていた時はあった。そして、全く違う方向から一段階前進したのだ、ということもあった。けれどもあとで、やはり、螺旋状に描く軌跡の中心にはロランがいたことを思い知るのが常であった。それなのに今度は違う。完全に迷子だ。どちらを向いて歩み出せばいいのか？とあちらこちら脱線し始めた。

そうこうしているうちに、友の会では終了してしまった。「仕方ない！とにかく最後まで読もう。今年中に！」定まらない視線をロランに集中させるように命じた。幾日も同じページを開けたままの状態が続いた。くせ者はキアレンツァ伯だった。親愛の情がわいてこないのだ。しかし立ち止まってはいけない。キアレンツァ伯の姿を避けるような気持で読み進んだ。もっと大人になったらわかるだろう、と考えることにして。

こんな訳で、自分自身の何らかの方向付けどころか、大きな課題をかかえて荒野に放り出されたような結果になってしまった。年が新しくなってからも、手掛りを求めていろいろと読んでみた。けれども、数ヶ月経た現在、「何もわかってはいない」ということが分かっただけである。“無知の知”と言えれば聞こえはよいが、ここに至って、こんな時に役立つべき基礎知識、すなわち世界の精神史というような知識が、学生時代に身に着いていないことが判明したのである。ロランが問題の3年半を経験する時に、深い部分に生きていた価値意識がどのようなものであったのか。本当に理解するには、ここで私も本格的に人類の遺産ともいべきものを学ばねばならない。それも頭で知るだけでは足りないのだ。

幸いにも、すでに仕事の方は初期の山場を越えることができている。小さい会社ではあるが、女性だけでコンピュータ室を運営している。（機械は融通がきかないとか、冷淡だとか言われるが、そのかわり「女のくせに」とも言わないから、考えようによっては、“誠意の通じる相手”であるとも言える。）まだまだ改善したい点は多々あるが、ここまででも、他には例がないであろうと自負している。いや、そもそも男性がいなければおかしい、という常識こそがおかしいのだが。しかし友の会でも「アンネットという女性は立派だと思うが、そんな女性がいたとしても、すきになるかどうかは分からない」という声を再度聞くにつけ、尊敬の念が愛と相入れないままで正直な生き方と言えるのか、と疑問に思わざるを得なかったのだ。“知行合一”なんて難しいことなんだろう。コンピュータ関係の人にロランの話をして、絶対に通じない。けれど、事務分析、プログラミングから数学関係、では『アインシュタイン伝』（矢野健太郎著）まで行くと、ロランの平和運動につながる。著者は、高校時代から立派な先生だと思っていただけに、次に『数

学への招待』という文庫版でロマン・ロランの『精神の独立宣言』に出会った時には、我家にもどったような気持だった。みんないっしょなのだ。ベートーヴェン、ルソー、ゲーテ etc. ものごころ着いて以来、愛着を感じるものはすべてロランに流れ込んでゆく。まるで、釈迦如来の手の平から出られない孫悟空そのものだ。

しかし、ロランから離れ、またもどる、という、まるで、目に見えないゴムヒモを体にくくりつけて必死に柱のまわりに同心円を描くような元気がある限り、私という人間は大丈夫だと思う。同業であると否とにかかわらず、私のまわりの方は、ロランは私の趣味だという位にしか考えていない。しかし、本当は逆である。ロランを通じて築きあげてゆく生き方を、職場という一つの場で実践しているにすぎない。ロランがあるからこそ、やっつけられるのだ。そうでなければ、失踪したり、気違いになった人の話を聞きもし、実際に目にもしているこの仕事を続けるなんて、とてもできないだろう。

これから、また大きな旅が始まりそうである。けれども、命の洗濯をするための場が、月に1度、京都にある限り、求心力に任かせて冒険してみてもいいのだと思う。

物を見るには光を当てねばならない。しかしそのエネルギーによって物自体が変化してしまう。だから見えているものが本当の姿かはわからない。それと同じように、自分を伝えるには言葉で表現しなければならぬ。しかし言葉に置換えた瞬間に、その言葉が逆に意識を規定してしまう。だから言葉で表現された自分が本当の自分なのかはわからない。

こんな違和感を拭い去ることができない為に、今はまだ、自分に正直であろうとすればするほど言葉が出ない。知識を吸収するだけでなく、表現する努力。このあたりもこころがけねばならない。ロランの3年半が提示する課題が、私にとって何年間を要するものなのか、見当も付かない。しかし、一步を踏み出す以外にないのだ。

高貴な精神

大橋哲夫

ロマン・ロランは、『戦いを超えて』の中で、次のように書いている。「私たちは二つの国、すなわち私たちの地上の祖国と、今一つ神の国をもっている。一つの国では、私たちは客人であり、他の国では私たちが建設者である。前者には、私たちの肉体と忠実な私たちの心情を与えよう。しかし私たちが愛するところの家庭も友人も、祖国も、いずれも、精神にたいして何の権利ももたないのである。精神は光である。それを嵐の上に高くかかげて、光を暗くしようとする黒雲を除くことが義務である」と。ロマン・ロランが私にとって限りなく魅力を持つのは、この高貴な精神の世界である。日常生活をはるかに超え、戦いを超え、歴史の長い時間の流れをはるかに超えて、その精神の世界はゆるぎなくロランの中にあり、そこに帰るたびに私の心は深い慰めを見出すのである。聖書に、「こゝへ 汝の目をあげ、頭をあげよ。汝の救い近づきたればなり」という言葉があるが、ロランの現実を見つめる視点の位置はじつに高い。

私たち一人一人の人間存在は、神の目から見ればきわめて小さな存在であって、私たちは、たえず、ごく身近な日常生活、家庭や職場やグループといった場で、悩み、いらだち、おもしろわづらっている。結局、人間が悩むのはごくごく小さな環境である。私たちはここから目を上げ、頭をあげなければならない。しっかりと遠く広い国を見ること、つまり「永遠」まで見はるかさなければならない。そうすることによって、現実を乗り越えて行く力を得、人間の最も深い本質的な欲求に応えることができると思うからである。ロマン・ロランの生涯を考えると、その健康への不安、結婚生活の失敗、政治へのいきどおり等、思いわずらうことは多かっただにちがいないと思う。にもかかわらず、ロランの精神は高く飛翔し、高貴な魂の星星と呼びかわしつづ、私たちの前に輝いている。私は、このロランの精神の高さをさらにくわしく学びたい。

京都女子高年 古田 泰子

打撃を受けることに自己本来の力を倍加し、どこまでも真実を追求して行くジャン・クリストフの苦悩を経て歓喜に至る偉大な魂の成長、力強い生命の流れは銀色の河の強烈なイメージを持って私の中に入り込んだ。それは強い感銘であると共に、これまでの私の稚拙な観念に対しては大きな衝撃であった。

私は生きるためにはまず精神だと、知であると思ってきた。しかしその反面自己の理知にのみ頼ることが、果して良いのかと反問せずにはいられなかった。理知は確かに人生の脱線から私たちを守るが、それは私たち人間を支えきれはしない。もつと別の物、つまり生命のあることを私はクリストフを通じて知ることができた。

生きることは時として死ぬことより難しいかもしれないが、これほど素晴らしいことがあるだろう。生命、生きて進む(ほとぼし)る命こそこの世の根底である。そして生命と共に魂があり魂を自覚することで精神が形成され昇華していく。そこに基づいて生きる者が、あらゆる敵に抵抗する力を持つことができるのだと知った。悩みも、喜びもみな生きているからあり、一途に自分の生を生きるため課せられていると肯定できた。生とは休戦のない戦闘である。彼が崩れかけてるその瞬間に、次の新しい生きる力が萌芽している。なんと強い生命のエネルギーだろう。私たちも多かれ少なかれ同じ生命のエネルギーを持っているんだ。

彼は常に戦いから逃げることなく立ち向い、そしてその戦いの中で自分自身を支配する力を身につけ、間違った観念を正し外面から内面へ円熟していった。彼はいつも生活に密着し、単に生命の熱情だけに動かされはしなかった。ここが彼の人生を真実のあるものにした理由だと思う。生活の中に、私たちはいかに多くの無限を持っていることか。現実が必ずしも真実とは限らない。だから理想を追っていく。それには、あるがままの人生を見、愛していかななくては行けない、そこから全てが始まるのだから。彼はこの可能性を信じ理想高く生きぬいた。この意味で彼は権力もお金も持たない、つまり俗物的英雄ではないが、心情においては正に英雄だ。

そして生きることは戦うこと、慟哭(どうこく)すること承認することにより人を愛さずにいられない。その孤独の痛みを知るから、自分を理解する人を捜し互いの心を癒(いや)そうとする。彼とオリヴィエとの熱い友情も、グラチエとの穏やかな関係もそうした所からくる愛情だと認める。人間にとって生命と共に欠く事のできないものは愛だ。広く深い愛の力、それが勇氣と希望を導いてくると確信できた。歴史の数々の戦争もみな己がよりよく生きるためになされたものだった。ローランは第一次大戦前に当りヨーロッパの調和をこの書の中で願った。現在私たちは極大な文明の中に、これから先人類が生きていくには全世界の調和ということが、そのまま写し代えられるのではないかと思う。クリストフは不屈の魂と愛と、いかなる時も自分を投影できる音楽つまり創造の三つの調和の象徴だ。

また私は自分の中に自信と可能性を見いだすかと思えば反対に、一人で人生を歩いていけるだろうかかと不安と焦躁のどうもつかない考えの中を回っていた。そんな状態に於て彼の伯父ゴットフリートの言った言葉は、一条の閃光であった。「人間は自分にできるだけの事をしなければいけない」そうだ。あまりにも多くの事を望みすぎるから、苦しくなってしまうんだ。しなければいけないことは常の一つ。生きている私たちは迷いもすれば、脱線もする。でも今自分が何をすべきかという事だけは見きわめていたい。一瞬一瞬を自分のものとしたい。彼のように真摯(しんし)に生きるために生きる、愛のために愛すというように。決して手段化したくはない。

クリストフは理想である。管理社会の規制された範囲にいる私にとって彼の自由な生き様は憧(あこが)れである。それを実践することは至難であるし、できる人は極わずかな者で、とても私など及ぶところではない。しかしそんな崇高な魂の存在を知ったことが、間接的にせよ私の生きる支柱となると思う。またそうあってほしい。彼の中に私は私たちの一部分、一部分を見る。いわば分身だ。彼の人生は私たちの経験したこともあれば、これから経験することも見いだす。だから私は彼に共鳴せずにはいられないんだ。

この本は人間の永遠のテーマである生きるとは何か、いかに生きべきかと真向から問いを投げた。私には答を出すことはできない。私は人生の批評家であっては行けないと思う。生の真直中にいる私たちにはそんなことは関係ない。私は人生の痛みも、食べるための苦しきもまだ知らない。自分で一つ一つ生きて確かめてみなくては。そして一生かかってもわからないかもしれない。でも人類が生を受けて以来歩んで来た生の営みを私もまた生きる。私はどこまでも流れ続ける河でいたい。(全文 転載許可済)

毎日新聞(1979年3月17日)から

ロマン・ロラン研究所から

受 贈 図 書

'78年度中に下記の図書を御寄贈いただきました。

書 名	寄 贈 者
◎ Annales de Bretagne et des Pays de l'ouest — Jean-Christophe, Syndicaliste? par Bernard Duchatellel	Bernard Duchatellel
◎ 莽 原	相 浦 泉
◎ クラムシーにおける ミュゼ・ロマン・ロラン開館記念写真集	井 土 熊 野
◎ 『種蒔く人』	石 田 喜 枝 子
◎ 『ヴィヴェカナンダ』	小 牧 近 江
◎ 『エトランゼ』	齊 藤 响
◎ 『ジャン・クリストフの見える丘』	島 崎 藤 村
◎ 『ロマン・ロラン』	蜂 川 譲
◎ 『ニーチェ』	ツ ヴ ァ イ ク
◎ 『浪漫的亡命者たち』	ア レ ヴ ィ
◎ 『タゴール選集』	カ ー
◎ 『雨雀自伝』	秋 田 雨 雀

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算245回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1978年11月25日（土）

242回例会

第67回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： ロマン・ロランと戦争 Ⅰ

『戦いを超えて』序論

助言者 波多野 茂 弥 先生

出席者 18名

風化しようとする戦争体験が新しい戦争のかげにおびえようと
している現在、ロランが戦争と徹底的に対決していこうと決意し
た——ロランのいう戦争とは具体的な戦いばかりでなく、大変内
面的な戦いでもあるのだが——80年に及ぶ生涯の基本的な生き
方を辿ることで、私たちは何を学びとることができるだろうか。
この崇高な序文に負うところ大であることを、あらためて認識し
合った。

1979年1月27日（土）

243回例会

第68回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： ロラン誕生日を記念して

“私のロランとの出会い”

出席者 18名

ロランとの出会いをひとりづつ語る。ロランへの感動から始ま

った人、宮本先生を知ってロランに近づいた人、それぞれ経過は違っても、純粋な感動と仲間を求めての行動は新鮮に息づいている。いい集りだなあ、大切に育ててゆきたいなあ、と願わずにはいられない。

2月24日（土）

244回例会

第69回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」

発表者 山口 修 平

出席者 13名

第一次世界大戦への経過を手短かに説明されたあと、日記からの引用もまじえて、ロランの苦しい胸のうちのをのぞいてゆく。発表者の熱意が伝わってくる。「人間を殺したまえ、しかし作品を尊重したまえ！」という誤解を招きかねない一節をはじめ、要は カルトクラー Kultur（文化）と シヴィライゼーション Civilisation（文明）の違いであると波多野先生や南大路先生に説明していただく。隣接する二国（独・仏）でさえ、認識概念がちがうと“人間同志”が通じなくなるのかと恐ろしくなる。

3月24日（土）

245回例会

第70回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 「プロ・アリス」

発表者 森 満 夫

出席者 11名

ロランの憎しみを入れない論調に対し、ハウプトマンの反論はアッチラの息子でよい、というものであった。この違いはどこか

らくるのか、ということで前回の文化と文明の相違に話は戻ってゆく。国家主義のもとでの戦争にいかに関与の独立（戦争より一段上の立場）を守りえたか、知識人としての自己の立場を守る力の根源をどこに求めるか、問題は果てしなく広がるばかりである。

「大洋感情」とフロイト

霜 山 徳 爾

フロイトとロマン・ロランの往復書簡のなかで、ロマン・ロランの使った「大洋感情（sentiment océanique）」という言葉がある。宗教に対する否定的なフロイトの論文「幻想の未来」に対して使われた。ロマン・ロランは、人間があの大海原に面するときの自然の感情、すなわち、限らないもの、絶対的なものを予感する独特な感情こそ、信仰の本質なのだと言っている。しかしフロイトは反対して、「大洋感情」なるものの正体は、実は自我が外界から分離する以前の、「自我と世界の一体感」への退行的願望の表現であり、無制限的な自己愛、自己の全能感の希求に他ならない、と手きびしく批判した。——しかし、フロイトは楯のもう一面を忘れていなかっただろうか。すなわち、大洋感情こそ全能的な自我の否定であり、小さな自我と外界との一体感の否定の希求であるということである。それは死と親和性の高い、きわめて「人間的な」感情であり、幼稚な気分ではなくて悟達の心眼なのである。

『人間の詩と真実』（中央公論社）から

あ と が き

早くから原稿をいただいております方々にはまことに申訳のないことですが、諸種の事情で発行がおくれ、漸く8、9号と続けてお届けできることになりました。

クラムシー — 1月30日1977年 — をいただきました井土熊野（いづちゆうや）先生は、三重大学医学部第二内科助教授でられますが、令弟の真杉氏がロラン研究者であるというご縁で、宮本先生のところへ三重医学部新聞（1979年2月20日号）に掲載されたこの原稿を、特に「ユニテ」のために、とお送りくださいました。クラムシーのロマン・ロラン文化館落成式に参列された唯一人の日本人としての貴重なルポルタージュです。

医の荒廃が叫ばれる今日、真の医師とは、と考えさせられることしきりですが、ロマン・ロランに傾倒するこのような医師の存在を知ることは、私たちに大きな希望を与えてくれます。病み苦しむ患者たちが精神的にも肉体的にも安んじて医学の恩恵にあずかることができるように、井土先生のようなお医者様が増えることを心から期待せずにはられません。

南大路振一先生からは引きつづきロラン＝マルヴィーダ往復書簡（5）をいただきました。学年末のご多忙の中を労をいとわず訳出してくださいました貴重な書簡です。ロランが若い日々を培われたマルヴィーダとのこまやかな友愛の姿を鮮明に見ることができます。「ユニテ」の読者には待ち遠しい読みもので、これからもよろしくおねがいたします。

椿充代さんのR・Rのための覚え書№2は自己にきびしく絶えず成長されるこの方のロラン像を知ることのできる好レポートです。重ねてのご寄稿をお待ちしております。

ユニテの広場に今回ご投稿くださいました大橋哲夫氏は随分古くからの会員で、以前は「ユニテ」の編集にも当られ、献身的に友の会のためにつくしてこられた方です。敬虔なクリスチャンとしてのお立場からロランとの結びつきを語ってくださいました。

研究所からのご報告は特にありませんでしたが、各方面からご寄贈いただきました図書目録を記載して御礼にかえさせていただきます。ありがとうございました。

セミナーは現在、“ロマン、ロランと戦争”という大きなテーマに取り組んでおりますが、ロランが「偶像」の中で述べたように、“思想の理解は心情のそれなくしては無意義であり、それは良識（ボンサンス）と智慧（エスプリ）なくして何の価値もない”のです。私たちはロランを学ぶことで絶えずユニテの輪をひろげていきたいと願っています。今後よろしくご協力をいただけますよう。尚、「ユニテ」に対するご批判やご意見などもどしどしお寄せくださればありがたいと存じます。

（編集部 相浦綾子）

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロランの友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切り日は特にもうけておりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時
場所 ロマン・ロラン研究所
会費 300円
講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所

ユニテ 第3期 第9号

発行日 1979年3月31日
発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL (075) 771-3281
印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/1/53/ Rolland, Romain: La Vie de Vivekananda et L'évangile Universel I. (éd. Stock, Paris, 1940)
- /RR/1/54/ Rolland, Romain: La Vie de Vivekananda et L'évangile Universel (Stock, Paris)
- /RR/1/55/ Rolland, Romain: Péguy. (éd. Albin Michel, Paris, 1944)
- /RR/1/56/ Rolland, Romain: Péguy. (éd. Albin Michel, Paris, 1944)
- /RR/1/57/ Rolland, Romain: Péguy. (éd. Albin Michel, Paris, 1944)
- /RR/1/58/ Rolland, Romain: Le Seuil, Précédé du Royaume du T. (Ed. Mont-Blanc, Genève)
- /RR/1/59/ Rolland, Romain: Le Voyage Intérieur. (Albin Michel, Paris, 1942)
- /RR/1/60/ Rolland, Romain: Empédocle d'Arrigente suivie de L'éclairé de Soinoza. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/61/ Rolland, Romain: Inde, Journal 1915-1943. (A. Michel, Paris)
- /RR/1/62/ Rolland, Romain: Inde, Journal 1915-1943. (Ed. Vineta, 1951)
- /RR/1/63/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. (éd. Albin Michel, Paris, 1952)
- /RR/1/64/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. (éd. Albin Michel, Paris, 1952)
- /RR/1/65/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. I. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/66/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. II. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/67/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. III. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/68/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. IV. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/69/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. V. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/70/ Rolland, Romain: Journal des Années de Guerre 1914-1919. VI. (éd. Albin Michel, Paris, sans date)
- /RR/1/71/ Rolland, Romain: Au-Dessus de la Mêlée. (Librairie Paul Ollendorff, Paris, 1915)
- /RR/1/72/ Rolland, Romain: Les Précurseurs. (Ed. de "L'Humanité", Paris, 1919)
- /RR/1/73/ Rolland, Romain: Quinze ans de Combat 1919-1934. (Ed. Rieder, Paris, 1935)
- /RR/1/74/ Rolland, Romain: Compagnon de Route (Essais Littéraires). (Ed. du Sablier, Paris, 1936)
- /RR/1/75-1/ Rolland, Romain: Compagnons de Route. (A. Michel, Paris, 1961)
- /RR/1/75-2/ Rolland, Romain: Mémoires. (éd. Albin Michel, Paris, 1956)
- /RR/1/75-3/ Rolland, Romain: Le Voyage Intérieur (Songe d'une Vie). (éd. Albin Michel, Paris, 1952)
- /RR/1/76/ Rolland, Romain: Sur la Révolution, la Paix. (Ed. Sociales Internationales, Paris, 1935)

- /RR/1/77/ Rolland, Romain: Histoire de L'Opéra en Europe Avant Lully et Scarlatti. (éd. E. De Boccard, Paris, 1931)
- /RR/1/78/ Rolland, Romain: Musiciens d'Autrefois. (Hachette, Paris)
- /RR/1/79/ Rolland, Romain: Musiciens d'aujourd'hui. (Hachette, Paris, 1922)
- /RR/1/80/ Rolland, Romain: Voyage Musical au Pays du Passé. (Librairie, Hachette, Paris)
- /RR/1/81/ Rolland, Romain: Voyage Musical au Pays du Passé. (Hachette, Paris)
- /RR/1/82/ Rolland, Romain: Haendel -les Maîtres de la Musique- (Librairie Félix Alcan, Paris, 1924)
- /RR/1/83/ Rolland, Romain: Haendel. (éd. Albin Michel, Paris, 1951)
- /RR/1/84/ Rolland, Romain: Les Aimées de Beethoven. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/85/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. La cathédrale interrompue III, Finita Comoedia. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/86/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. La cathédrale interrompue II, Les Derniers Quatuors. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/87/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. La cathédrale interrompue I, La Neuvième Symphonie. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/88/ Rolland, Romain: Goethe et Beethoven. (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/89/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices, Le chant de la résurrection (La messe solennelle et les dernières sonates). (Ed. du Sablier, Paris)
- /RR/1/90/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. De l'héroïque à l'annexionnata. -Nouvelle édition revue et corrigée.- (Ed. Sablier, Paris)
- /RR/1/91/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. -2^e édition.- (Ed. Sablier, Paris)
- /RR/1/92/ Rolland, Romain: Beethoven, les grandes époques créatrices. (A. Michel, Paris, 1966)
- /RR/1/93/ Rolland, Romain: Valmy. (éd. France D'Abord, Paris, 1946)
- /RR/1/94-1/ Rolland, Romain: Les Pages Immortelles de J. -J. Rousseau. -choisies et expliquées par Romain Rolland.- (éd. Corrèa, Paris)
- /RR/1/94-2/ Rolland, Romain: Le Dernier Procès de Louis de Berouin 1527-1529. (Imprimerie de la Paix, Philène Cucciani, Rome, 1892)
- /RR/1/95/ Rolland, Romain / Hespe, Hermann: Briefe. (Fretz and Wasmuth Verlag A., Zürich, 1954)
- /RR/1/96/ Rolland, Romain: Jean-Christophe de Romain Rolland. -présenté aux enfants par Émile Gellier-Laurie.- (éd. Albin Michel, Paris, 1932)
- /RR/1/97/ Rolland, Romain: Jean-Christophe de Romain Rolland. -présenté aux enfants par Émile Gellier-Laurie.- (éd. Albin Michel, Paris, 1932)

— すぐれた文学は一つの人生である —

木下 順二

すぐれた文学作品は、いわば一つの人生である。若い頃、いくつかのすぐれた文学作品にわれを忘れて読みふけたという思い出を持つ人は幸福だ。なぜかなら、その人は若くしていくつかの人生を、文学というものののみが保障する豊かな複雑さにおいて知ったことになるのだから。だからもっと強く、その思い出を持たない人は不幸だと言い切ってもよかろうかと思う。柔い感受性に恵まれた若い心は、およそ文学なるものが本来持っている本質を享受することにおいて、最も鋭敏であり最も純粋である。理解の届かぬところや多少の読み違いは、後年になって埋められればいいのである。———ということは、ある年齢になって、それは四十代でも七十代でも、もう一度読みなおす楽しみが予約されることを意味するわけにもなる。若い頃の読書という点では私自身は幸福なほうの部類に属する人間だと思うが、だかもっと読みふけていたら、という気持ちが残るのは当然だろう。ところで、その読みふけりかたにもいろいろあると思う。例えば私の場合の、例えばロマン・ロランの場合。旧制高等学校にはいらたての頃（今なら高校三年生だ）、私は突然「ジャン・クリストフ」にとりつかれた。そしてそれを終ると長い長い「魅せられたる魂」、それが終ると次には、というふうに読んで行って、邦訳のないものは英訳で読み（Frederic Lees 訳の「ミケランジェロの生涯」などまだ書棚に残っているが）、次には何でももとの形で読まなければと、習い始めて間もないフランス語で「愛と死との戯れ」に食いついて、これはもちろん数ページで挫折した。だがそのとき没入できたもの、分りにくかったもの、つまらなかったもの、挫折したものの総てを含めて、青春のある時期、私が熱い「ロマン・ロランの季節」を持ったというそのことは、私という人間の内部に、なにものにも換えがたい何かを残してくれたと、確かに言っていだろうと思う。

『朝日ジャーナル』（1978年7月21日号）から